

## パラタイムが変わる出版

\* 先日、本会の海外 Section のメンバーと議論することがあった。その中で「電子情報通信学会の論文の投稿料（＝掲載料）が高い。世の中では、無料のジャーナルも出版されている。」と指摘された。確かに大学ユーザとして学生の論文を投稿する際にはこの料金は高く感じている。

\* もちろん合理化してコストダウンを図るべきというのは当然であるが、ちょっと別な見方をしてみた。無料にするということは、かかるコストを何かで補うことを意味する。

① スポンサーを見つける。広告？

難かしいだろう。

② 新しいビジネスモデルを考える。

一部のフリーモデルでは、集まる情報を集約し、ビッグデータとして戦略的に技術分析をして、情報として提供するという考えである。これは怖いので今回は議論を避ける。

③ 読む側が負担すべき？

これは一理あるかもしれない。情報をもらう側がコストを負担するべきであるという考えである。

\* さて、実は大学の図書館では、世界の巨大な出版社とのシリーズの電子コンテンツの契約に膨大な料金が発生していることは、多くの人が知っているだろう。一方で、高いからやめるには余りにもコンテンツが充実、巨大化してやめられない。どう考えても優越的な立場から交渉されているとさえ思える。

\* わざとネガティブに書いたが、「電子情報通信学会もどこかの商業出版社と組んで、高値で論文コンテンツを売るべきである」にはコンセンサスがないことは明白である。これは行きつくところ、売れるコンテンツを集め、売れないコンテンツは論文には扱わないことも起こる。例えば、理論で余り読まない論文よりも、バズワードを中心に論文の特集をやっていくエディトリアルポリシーにも行きつく。もちろん読者や会員に有益な論文であることは重要であるが、論文は「価値」を評価しており、「売れる」を評価していない。

\* 現在の本会のイメージでは投稿者：会員全体：読者＝1：1：1（1である必要はないが）でバランスをとって負担をしていくとしている。決してもうけるためではなく、一方で、ビジネスマインドを持って合理的に学会を運営していく必要がある。

\* 近年サイテーションインデックスやインパクトファクターが重要視されている。論文誌を扱う者としては我々のメンバーや仲間である投稿者の大切な研究結果を多くの人に普及させる必要があるため、最重要項目として、編集のメンバーは改善に大変苦労している。原点に戻ると、本当に良い論文とは真のブレークスルーを生むであろう新規性の高い、普遍性の高い、更に波及効果の大きい論文であったはずである。しかし、一つの見方としては多くの引用がある。つまり人気が高いバズワードな研究もこのインパクトファクターを上げることになる。本質的な質を向上させてインパクトファクターを上げなくてはいけないという結論にたどり着くことになる。

\* Google でサーチして上位に出るものは、最も重要で優れたものではなく最も人気が高いことであることをよく忘れてしまう。我々は 10 年、20 年後に真に役立つ会員の論文を、扱っていかねばならない使命がある。サイエンスにとって重要なことは、常に謙虚さを持ち、新しいことに対するオープンマインドでの取り込みを行うことであろう。

\* 本会で戦略向上に推進している I-Discover はマルチ言語に対応することが素晴らしい。日本語、ベトナム語、韓国語、中国語…で書いた論文を自由に検索してヒットする。今後優れた自動翻訳技術もできると思う。すべてを英語にするのとは違う、グローバル化の新しいアプローチである。

\* 私が「学生をみんなアメリカに行かせようと思っている。」「帰国子女が多いと英語ができてとても助かる。」と言ったら、「英語ができればいいのではない。帰国子女の中には日本人の顔をしたアメリカ人がいるじゃないか。大切なのは、自分の国の言語やカルチャーや仲間といったアイデンティティをしっかり持って、でも技術やビジネスではオープンにグローバルに活動する能力を持つことだ。」と怒ったように言ったのは、時の人であり私の高校、大学での友でもあり、米国大学の修士号を持ちグローバル化の先頭に立つローソンの新浪剛史社長である。彼の言葉は I-Discover を進める自分にとって大きな元気の源になった。電子情報通信学会をどうしよう。出版を電子化し論文誌や会誌は英文にするのか？ 編集理事はのんびりすることも許されていなかった…。

(編集理事 山中直明)